

「市民」を育てる — 社会マネジメント学の真髄 —

松 下 啓 一

社会マネジメントとは

講演をするとき、最初に自己紹介をするが、そこで何を話すのかは、直前にお会いした人の反応で決まってくる。「社会マネジメント学科です」と名刺を出すと、怪訝な顔をされることがあるが、その場合は、自己紹介は、「社会マネジメント学科とは何か」から話を始めることになる。

一般市民に向けて、私は、社会マネジメント学科を次のように紹介している。

文句を言い、欠点をあげつらうのは簡単である。しかし大事なのは、対案や対応策ではないか。社会マネジメント学科は、「文句を言い、欠点をあげつらうのではなく、その欠点を克服する対案や対応策を考え、提案し、それを現場で実践できる学生を育てる学科である」。なるほどと、頷いてくれる人も多い。私たちの取り組みは、社会的から期待されているのだらうと自信を持って講演を始めることができる。

地方自治と社会マネジメント

私の専門は、現代自治体論であるが、それに対する私の学問的態度も、まさに社会マネジメントである。

フランス革命以後、国民国家ができて以来、国民と政府との関係は、政府の専横から国民を守ることにあった（立憲主義）。自治の理論は、その政府を市民がコントロールするということで組み立てられてきた。つまり、役所は暴走し、悪いことをするという前提で、理論が組み立てられているのである。

この考え方は、要するにお役所をチェックしていれば、市民はハッピーになれるという思想である。しかし、長い間、市役所で働いた経験から、それではとても市民は

幸せになれないと実感している。だから、私は、役所をコントロールすることも大事であるが、同時に、市民自身も、まちのことを考えて、それを実践することも重要であると考えている(新しい公共論)。要するに、政府に要求し、文句をいうだけでなく、市民一人ひとりが、提案し、対応策を出すのが重要であるということであるが、これはまさに社会マネジメントである。

ただ、私のような自治理論は、学会では少数派である。今は、フランス革命があった18世紀ではなく、21世紀ではないかと小さな声で反論しているが、力及ばず、居心地の悪い思いをすることもある。

ときどき、自信を失いそうになる私を支えてくれるのが、社会マネジメント学科である。文句を言うだけでなく、創りあげていくことが重要というのは、私の自治理論と同じだからである。

学生たちとの実践

こうした社会マネジメントの意義を学生たちにも体得してもらうのが、教員としての私の役割である。そこで、学生たちを誘い、あちこちに出かけている。提案力や実践力は、畳の上の水練ではとても養うことはできない。とにかく場数を踏むことが一番で、目上の人に会い、見知らぬ市民と議論するなかで、はじめて力がついていく。社会マネジメント学科のなかでは、「頭の金森ゼミ、行動の松下ゼミ」(金森ゼミ生談)といわれているそうである。たしかに、ときどき、学生たちと一緒に市長さんにお会



ゼミの様子1 焼津市のワークショップにて

いことがあるが、学生たちは、適度の緊張感と親近感で、実にさやかに市長さんに対応する。市役所の職員たちとの交流する場合も多いが、あっという間に水平な関係をつくりあげてしまう。これは、「先生」とおだてられ、実力以外のところで勝負している私自身が反省する機会でもある。

あちこちのまちづくりワークショップに出かけ、初めて出会う市民の人たちと意見交換をする機会も多いが、学生たちは、あっという間にその場の人気者になる。小さな学科なので1年生の時から知っている学生も多いが、学生たちも脱皮するのである。



ゼミの様子2 「Sa・Ga・Jyo! 6」という名称で、イラストまでつくられるようになりました。イラストは、子どもによるまちづくりを実践している非営利活動団体スマイル・ミニシティ・プロジェクト代表の山家昌則さんの作品です。

再び社会マネジメント学科の意義

私たちは、民主主義の社会に暮らしているが、この民主主義が有効に機能するには、市民一人ひとりの自律性と、共同体のことがらを我がことのように思う貢献性が求められる。これが「市民」であるが、サガジョのような教養大学は、こうした市民を育てていくのが任務である。そこに、ただ文句言うだけでなく、対案を提案できる学生を育てる社会マネジメント学科の存在意義がある。社会マネジメント学科は、案外、サガジョの基幹学科ではないかと思っているが、ここでも声高に主張するのではなく、地道に実践していくなかで、存在意義を示していくことが大事なのだろう。